

大麦管理情報 (第7号)

1 気象経過

- (1) 3月中旬の平均気温は7.3℃（平年差+0.9℃）と高く（図1）、降水量は68.0mm（平年比149%）と多かった（図2）。日照時間は42.8時間（平年比97%）と平年並みだった。
- (2) 3月5半旬の平均気温は9.1℃（平年差+1.8℃）とかなり高く（図1）、降水量は12.5mm（平年比48%）と少なかった（図2）。日照時間は14.5時間（平年比64%）と少なかった。

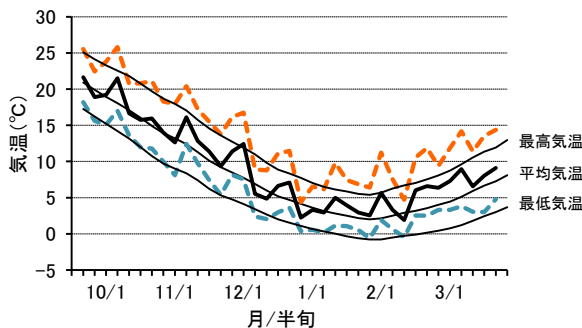


図1 気温の推移 (富山地方気象台)

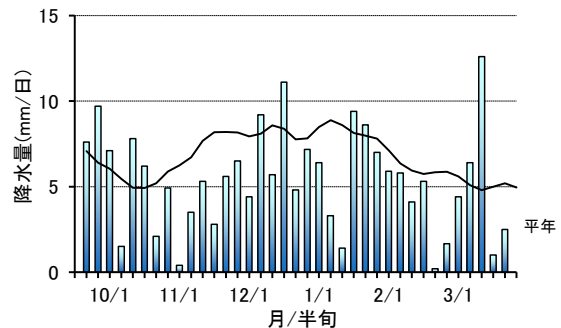


図2 降水量の推移 (富山地方気象台)

2 生育概況

- (1) 草丈は、平年よりかなり長く（平年差+17.0cm）、茎数は、平年よりかなり少なく（同-215本/m²）、葉色は、平年並み（同+1.6）となっている。
- (2) 葉齢は、平年よりかなり進み（同+2.1葉）、幼穂長は、2.9cmで、平年よりかなり進んでいる（同+1.9cm）。
- (3) 葉齢を揃えて比較すると、草丈、茎数、葉色はほぼ平年並みとなっている。

表1 大麦生育観測ほ等調査結果 (3月29日)

(播種様式：ドリル)

	播種日 (月/日)	苗立数 (本/m ²)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (葉)	葉色 (SPAD)	幼穂長 (cm)
				(本/株)	(本/m ²)			
31年産	10/8	178	43.2	3.1	529	12.9	44.0	2.9
30年産	10/5	197	20.9	4.1	813	10.2	43.0	0.5
平年	10/6	176	26.2	4.2	744	10.8	42.4	1.0

注) 平年は21～30年産の平均

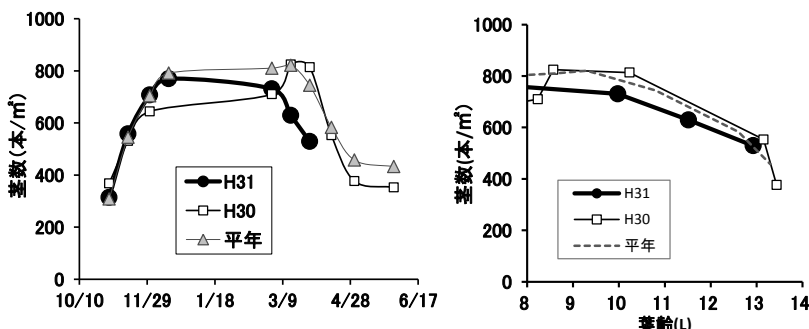


図3 茎数の推移 (左：日数ベース、右：葉齢ベース)

注) 平年は21～30年産の平均

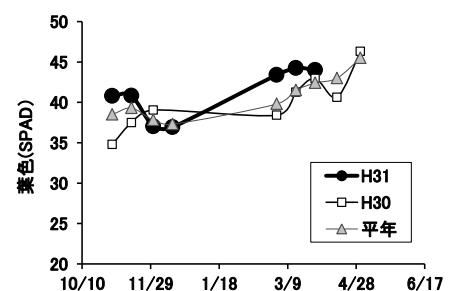


図4 葉色の推移

注) 平年は21～30年産の平均

(4) 幼穂長に地域のばらつきが見られるが、幼穂長から生育を予測すると、県平均で止葉展開期は4月1日頃、出穂期は4月12日頃と見込まれる。

表2 幼穂長に基づく生育予測

	幼穂長 (cm)	止葉展開期	出穂期	3/29以降の気温が平年より高く 推移した場合の出穂期の予測						
H31産	2.9 (2.1~4.0)	4/1 (3/26~4/7)	4/12 (4/6~18)		<table border="1"> <tr> <td>平年差</td> <td>+1℃</td> <td>+2℃</td> </tr> <tr> <td>出穂予測</td> <td>4/11 (4/6~16)</td> <td>4/10 (4/6~15)</td> </tr> </table>	平年差	+1℃	+2℃	出穂予測	4/11 (4/6~16)
平年差	+1℃	+2℃								
出穂予測	4/11 (4/6~16)	4/10 (4/6~15)								
H30産	0.5	4/13 (4/7~19)	4/23 (4/18~27)							
平年	1.0	4/11	4/22							

注1) H31年産は、3月29日以降の気温が平年並に推移する場合の予測日 (H18年普及に移す技術)

注2) () 内は予測日及び調査結果の幅を示す。

注3) 近年は21~30年産の平均

3 当面の技術対策

(1) 排水対策

- ・ 出穂後の登熟条件を良好に保つため、排水対策を徹底し、根の健全化を図ることが重要である。
- ・ 水稻作業が始まると、用水や隣接田からの漏水の可能性があるので、水口や畦畔を点検するとともに、排水溝の手直しや、深く掘り下げた排水口への連結を徹底し、湿害を確実に回避する。

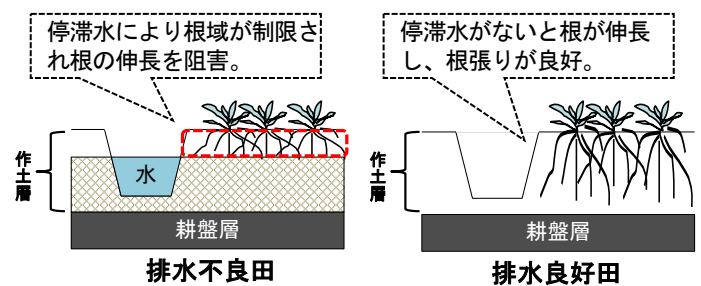


図5 排水の良否と根の伸長のイメージ (広域普及指導センター作図)

(2) 止葉展開期追肥

① 肥効調節型基肥栽培

- ・ 葉齢を揃えると平年並みの葉色が確保されており、肥料成分の溶出が登熟後半まで続くため、追肥は行わない。

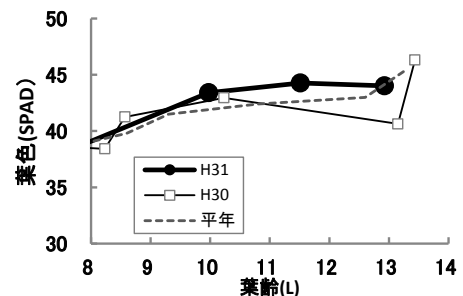


図6 葉色の推移 (葉齢ベース)

注) 平年は21~30年産の平均

② 分施栽培

- ・ 生育は平年より10日程度進んでおり、止葉展開期を迎えているほ場では、速やかに施用する。
- ・ 追肥時期が遅れると、硝子率が増加することから、出穂11日前 (止葉展開期) を目安に、遅れずに施用する。 また、過剰に施用した場合、硝子率が増加することから、生育量に応じて適正に施用する。

表3 止葉展開期の生育と追肥量の目安

葉色 葉色板	予想穂数 (㎡当り)	窒素追肥量 (kg/10a)
5未満	500本未満	2kg
	500本以上	1~2kg
5以上	500本未満	1kg
	500本以上	追肥しない

注) 葉色板の5はSPAD502で「45」

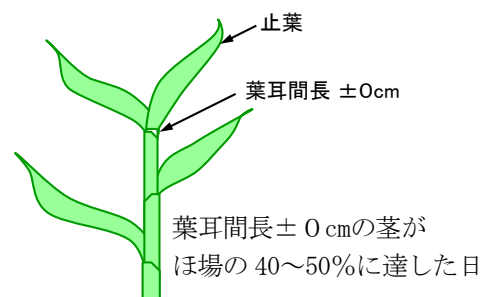


図7 止葉展開期のイメージ

(広域普及指導センター作図)

(3) 赤かび防除の徹底

- ・ 出穂期は、生育観測は平均で平年より10日早い4月12日頃になると予測される。なお、**地域やほ場による生育差が大きいことから、必ずほ場毎の出穂状況を見極め、最も効果的である穂揃期（開花始め）防除を確実に行うとともに、その7日後の2回防除を確実に実施する**（図8）。
- ・ 防除効果は液剤の方が高いため（図9）、**特に1回目の防除は、可能な限り液剤による防除**を行い、規定量の薬剤が確実にかかるようにする。
- ・ 北陸地方の1か月予報によると、4月は降水量が多いと予想されることから、**適期に散布することを優先し、短い晴れ間を利用して、確実に防除**を実施する（図10）。
- ・ 無人航空機で防除する場合は、定められた飛行速度や高度等を守り、均一な散布に努める。
- ・ 防除効果を高め、かつ周辺作物や住宅地への飛散防止を図るため、風の弱い時間帯に散布する。

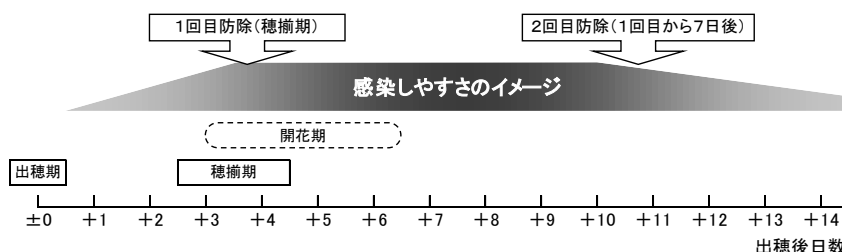


図8 赤かび病の感染しやすさのイメージ（広域普及指導センター作図）

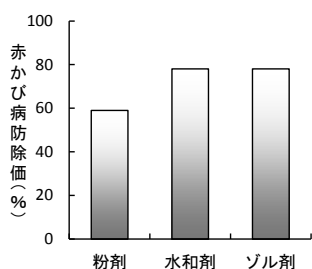


図9 トップジンMの剤型による防除効果の違い

（農研機構 九州沖縄農業研究センター）

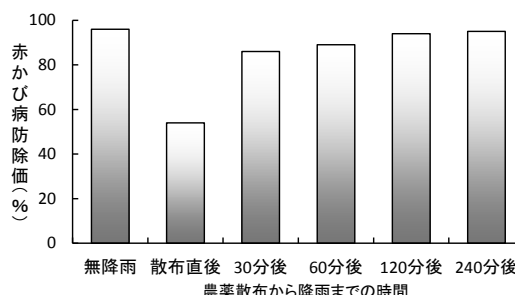


図10 農薬散布から降雨までの時間の影響

注) 防除薬剤：トップジンM水和剤

降雨は強い雨（25 mm/h）を2時間継続して実施

（農研機構 九州沖縄農業研究センター）

表3 赤かび病の防除薬剤

防除時期	剤型	薬剤名	希釈倍数	散布量 /10a	使用時期 (収穫何日前まで)	使用回数	作用機構分類等※3
1回目： 穂揃期 (開花始め)	粉剤	トップジンM粉剤DL	—	4 kg	14日	3回以内※2	B(1)
		ワークアップ粉剤DL	—	3	7	3	G(3) DMI
2回目： 1回目から 7日後	液剤	トップジンM水和剤	1,000~1,500倍	150 ^{リットル}	30日	3回以内※2	B(1)
		トップジンMゾル※1	1,500倍	150	14	3※2	
	(無人航空機による散布)	シルバキュアフロアブル	2,000	150	14	2	G(3) DMI
		チルト乳剤25	1,000~2,000	150	21	1	
		ワークアップフロアブル	2,000	150	7	3	
	(無人航空機による散布)	ゾル※1	ストロビーフロアブル	2,000~3,000	150	14	3
トップジンMゾル※1			8倍	0.8 ^{リットル}	21日	3回以内※2	B(1)
シルバキュアフロアブル			16	0.8	14	2	G(3)
チルト乳剤25	8	0.8	21	1			
ワークアップフロアブル	10~16	0.8	7	3			

※1 取り扱いメーカーによっては、適用がないので注意する。

※2 出穂期以降は1回。チオファネートメチルを含む農薬の種子消毒の使用回数を含む。

※3 農薬の作用機構分類に基づくコード。薬剤耐性菌発生防止のため、2回目は異なる系統の薬剤を使用する。

QoI 剤は1作期1回までの使用とする。DMI 剤は出穂後の赤かび病防除2回のうち1回までの使用とする。